

# 文化がつなぐまちの活性化

## —駅前文化ゾーン形成事業「七夕」をテーマとした 科学館、美術館、音楽館の連携の取り組み—

静岡科学館る・く・る 係長 池田博史

### 1. はじめに

静岡市文化振興財団は、平成6年に静岡市における市民の文化振興事業の実施や、静岡市の設置する文化施設等の管理に関する事業を行うために設立された団体である。平成24年度に公益法人化し、「市民が各種文化に触れる環境の整備と市民自身による文化創造活動を促進し、もって魅力ある静岡文化の創造、継承、発信に寄与する」ことを目的に、現在市内の22の指定管理施設と文化施設を運営している。

専門性を活かした施設ごとの取り組みに加え、多様な分野の専門館を運営する財団として、異分野間の施設連携のモデルを構築すべく取り組んでいる。その中でJR静岡駅前に隣接する静岡科学館る・く・る、静岡市美術館、静岡音楽館AOIの連携については、静岡市においても交流機会の促進と位置づけ、文化活動を通じ市民交流や中心市街地のにぎわい創出に積極的に貢献するものとして期待されている。

上記施設の概要及びその他の管理施設は以下のとおりである。

#### <静岡科学館る・く・る>

平成16年3月にJR静岡駅の南口の再開発ビルの中にオープン。開館以来、科学を核とした子どもたちのための文化の発信基地として、多くの子どもたちに夢と希望を与える夢広場の創出を目指し事業を展開してきた。認知科学の展示や年間200を超えるワークショップを中心にした参加体験型の科学館であり、年間26万人の来場者が訪れている。

#### <静岡市美術館>

平成22年5月にJR静岡駅北口のビル内のフロアに開館した都市型美術館。年間を通じた企画展を柱に、幅広いジャンルの展覧会を実施。誰もが気がるに立ち寄れる“ちょっと面白い、街の中の広場”としての美術館を目指す。

#### <静岡音楽館AOI>

未来ある静岡の音楽文化を担う場所として、平成7年5月に開館。JR静岡駅前の静岡中央郵便局建物内に位置し、客席618席のシューボックスタイプのホールがある。芸術監督野平一郎氏のもと、静岡から発信する新しい音楽文化の創造、発展を目指し、多彩なコンサート、講座等を開催している。

#### <管理運営施設一覧>

指定管理施設：静岡科学館る・く・る、静岡市民文化会館、静岡音楽館AOI、生涯学習センター等（13施設）、東海道広重美術館、静岡市美術館

---

管理運営受託等施設：旧マッケンジー住宅、静岡市民ギャラリー、中勘助文学記念館、清水文化会館マリナート

## 2. 静岡科学館、静岡市美術館、静岡音楽館（三館）共同事業とは

静岡駅前に隣接する静岡科学館る・く・る、静岡市美術館（～平成 21 年：静岡アートギャラリー）、静岡音楽館 AOI の三館は、その立地条件を生かし、静岡科学館開館の平成 16 年より以下のようなコンセプトで共同事業を実施してきた。

「第 2 の学校」：

三館をフレキシブルに活用して未来を担う子どもや市民に「ほんもの」に触れる機会の提供

「駅前文化ゾーンの形成」：

中心市街地の活性化と静岡市の貌にふさわしい文化ゾーンの形成

「親しむ」：

生活の中で芸術や科学を感じることができる環境づくり

### 1) これまでの主な三館共同事業

各施設で実施する主催事業に対して、他館が関連事業やワークショップなどを開催することで、事業の質的広がりや広報への協力を行ってきた。また、各施設で行われる聴講型の講座に対し、興味を持つ市民を共通ターゲットとし、「しずおか駅前文化塾」として三館で定期的に開催される聴講型講座をシリーズとして紹介する広報展開を行った。

これらの事業による連携に加え、地域と文化施設をつなぐ試みとして、「チケット de スマイル」事業を展開している。これは静岡科学館る・く・る、静岡市美術館、静岡音楽館 AOI の入館券および主催事業チケットを提示すると、駅周辺の約 60 の登録店舗にて割引などのサービスを受けられるものである。文化施設に来場した他都市を含む市民が、地域へ出かけることでにぎわいを創出し、また登録店舗では各施設のポスターやチラシを掲示し、店舗を訪れた人が文化施設へ足を運ぶ恒常的な回遊の構図をつくっている。利用率については各店舗の負担を考え明確なアンケート集計ができていないが、美術館の展覧会に合わせメニューを考案する飲食店や、静岡科学館の来館者向けのオリジナルセットを提供する店舗などその輪は広がっている。

### <おもな三館共同事業一覧>

平成 21 年度：「夏休み昆虫の世界」関連事業及び科学館・美術館セット券の販売、講演会シリーズ「しずおか駅前文化塾」

平成 22 年度：「静岡市美術館開館応援イベント」各種事業展開、講演会シリーズ「しずおか駅前文化塾」

平成 23 年度：「ジョン・ケージ：フォーウォールズ」、「レオナルド・ダ・ヴィンチ美の理想」関連事業、講演会シリーズ「ミュージアムカフェトーク」

※平成 21 年度の美術館は静岡市美術館の前身である静岡アートギャラリー

## 2) 運営体制

三館共同事業については、月 1 回のペースで実務担当者による打ち合わせを持っており、事業の実施内容に加え、各館での課題や、将来的な共同事業の方向性などについての情報共有の場として機能している。顔の見える関係を維持することで、会合以外の場でも広報に関する情報交換や、企画アイデアなどの協力を仰ぐことができる。また、施設により事業企画スパンが異なるが、事前に各施設の企画状況を共有できるため、企画段階から連携のポイントなどを取り込むことができている。

## 3. 「七夕をめぐって」共同事業の詳細

これまでの三館共同事業では他の事業の応援企画として関連事業を実施することが多かったが、平成 24 年度の共同事業では各施設が主体的に取り組むために、連携を前提としたテーマ設定を行うこととした。そこで提案されたのが美術、音楽、科学で内容的にも各施設が主体的に取り組めるテーマ「七夕」であった。事業実施時期については 6 月から 8 月の期間ときまった。2 年前の平成 22 年のことである。この 2 年前の段階で、美術館、音楽館でのメイン事業が確定していく中、科学館ではまだ計画の「け」の字もできていないという状況でのスタートであったが、幸い、平成 24 年 2 月に宇宙をテーマとした企画展を予定していたので、その中からコンテンツを見出していくことにした。

これらの事業の実施によって、各専門館への興味関心を持った来場者が、統一のテーマを掲げた各館の事業を回遊することで、各館の来場者層を広げ、中心市街地のにぎわいの創出が行われることを期待した。

### 1) 各施設での事業展開

#### ① 静岡科学館る・く・るでの取り組み

静岡科学館では天文への科学的興味を持った市民に対して、文化としての七夕への民俗学的なアプローチや、それらを表現する芸術的視点へ興味の幅を広げることを目的とし、テーマ「七夕」のきっかけとなった静岡音楽館 AOI 委嘱作品「星合曲」の流れる空間で天体写真を楽しみ、七夕の星たちについて学ぶ「七夕の星空」展示、国立天



ミュージアムカフェトーク「ガレージトーク」

文台副台長の渡部潤一氏を招いての「ミュージアムカフェトーク『夏の星空講演会』『ギャラリートーク』」、美術館と科学館をつないだ観望教室「夏の星空を観察しよう」の3事業を実施した。

「夏の星空を観察しよう」では科学館を会場とせず、美術館と近隣小学校を会場として実施した。静岡市美術館の展覧会「七夕の美術」の会場で、「七夕」の歴史的背景や人々とのかわりを、展覧会を企画した美術館学芸員が美術作品を通して解説した。その後、展覧会会場内での静岡科学館スタッフによる「星空散歩」で天文学から見た七夕を学び、最後に市内小・中・高校の教員ボランティアによる「観望会」で実際の星空を観察するという盛りだくさんの内容であった。



美術館の展示室で「星空散歩」

## ② 静岡市美術館での取り組み

静岡市美術館では静岡音楽館 AOI で田村博巳氏（演出家、国立芸術劇場芸術部副部長、静岡音楽館 AOI 企画会議委員）が企画するコンサート「日本の響きでつづる 七夕のまつりに」にインスピレーションを受けて企画を行った。儀礼としての七夕を今なお守り伝える京・冷泉家の《乞巧奠祭壇 星の座》を特別出品するほか、もう一つの七夕ともいうべき日本独自の天稚彦の物語絵巻を紹介、さらに「星合」の図像を継承する近代日本画（美人画）の名品などを展示することで、“星に願いを”という思いを込めた「七夕の美術—日本近世・近代の美術工芸にみる」である。民俗学や歴史学の視座に立った博物館的内容で実施される他の先例に学びながら、“美術にみる七夕”を意識して展示構成した。展示の最後の部屋には家庭用プラネタリウムを設置し、期間中数回、静岡科学館職員による星空解説を行った。



「七夕の美術—日本近世・近代の美術工芸にみる」

美術館と音楽館の連携による「ミュージアムカフェトーク」では、静岡市美術館学芸員吉田恵理がコーディネータを務め、田村博巳氏をゲストスピーカーに招き「七夕：コンサートと展覧会ができるまで」を実施した。また、その他多様な関連事業に加え、数学、科学的要素を取り入れ、黄金比の研究者で造形作家の日詰明男氏による、エントランスの天井に、幾何学オブジェを羽衣天の川として市民参加型の展示に仕立てたり、七夕フィボナッチタワーをビル共用スペースに展示するなど、異分野連携と駅前の活性化を意識した展開を行った。

### ③ 静岡音楽館 AOI での取り組み

静岡音楽館では、「七夕」をテーマにした日本各地に伝わる伝統芸能を紹介した「日本の響きでつづる 七夕のまつりに」を開催した。また、静岡市美術館で開催するミュージアム・コンサート《乞巧奠 星の座》の前で聴く「乞巧奠／星合曲」、七夕の前夜に行われた伝統音楽について学び聴く「雅楽：星空の調べ」を企画した。



ミュージアム・コンサート「雅楽：星空の調べ」

## 4. 成果と課題

### 1) 成果：連携によるシナジー効果（事業の質の向上）

静岡科学館が行った各事業では、科学的興味を動機とする参加者に対して、「七夕」の歴史的背景や民俗学的視点による人々の生活とのかかわりを、美術作品を通し解説することで、参加者からは「七夕の色々な知識、美術についても知ることができ勉強になった」「美術館で昔の人と会話ができた、星空散歩と観察でたくさん知れた」など、その興味を文化・芸術へと広げるとともに、星への興味をより高めたことがアンケートからうかがえた。

美術館では、自主企画を構成するにあたり、連携は内容の充実において大変効果的であり、ミュージアム・コンサートや科学館協力の星空解説など含め、「企画力のある展覧会」「季節の行事をテーマとした斬新な切り口」との高い評価をもらうことができたとのことであった。

音楽館では、伝統音楽だけでなく、展覧会において日本美術と併せて事業を提供できたことで、内容的な意義がより大きくなったと評価しており、来場者の満足度も高いものであった。ミュージアム・コンサートについてもレクチャーを交えながら、質の高い企画を提供できたとのことであった。

いずれの館でも来場者の反応が非常によく、連携により事業の内容の広がりや質の向上を図ることができた結果ではないか。

### 2) 課題：集客、回遊性

今回の最大の課題は集客であった。科学館では大規模な事業展開ではなかったが、科学教室やミニ展示など、これまで実施してきたノウハウを活かしたことや、夏の子ども向けの広報との相乗効果から、目標を上回る参加者であった。しかし、その他の事業については目標数に対して、美術館で60%、音楽館で80%程度の来場者数であった。

これは、連携を前提としたテーマ設定をした際に、七夕の音楽や、七夕の美術など市民にとってイメージが定着できなかったことが大きかったのではないかと考えられる。広報については、「連

---

携をしていること」についての情報提供が圧倒的に不足していた。回遊を目的としている以上、連携のイメージ作りができなかったことは大きな反省である。

また、普段の来場者ターゲットの異なる館同士で、集客を意識した回遊を考える場合、回遊のありかたについても発想の転換が必要となるかもしれない。これまでの連携イメージは、三館を「同じ人」が回遊するイメージであった。三館それぞれの特性を集めた「統合テーマ」での展開を目指し、駅前三館が統合した「ひとつの館」となり、この「統合館」を訪れた人に、各館の育んでいる全要素を体験していただくことを前提としていた。しかし、ここに、展開としての限界の遠因があるかもしれない。

例えば、どこかの「博物館」に行っても、すべて見て回るばかりが見方ではない。好きな分野、こだわりのある分野だけを見れば、その人にとっては満足である。統合的な性格を持つ館なら、なおさら、すべての来館者がすべてを見る率は低い。駅前「統合館」にやってきた人も、好きなフロアだけに立ち寄ればよいのではないか。全部に回遊していただくことはなく、好きな人が、好きなところ（だけ）へ出向く気軽さ。ただし、我々としては、気軽に「他フロア」にも立ち寄れる雰囲気があるかどうか、が非常に重要となってくる。視野の外縁に、他分野の色彩が見えてくる環境づくりである。

## 5. おわりに

「まちの活性化」には中心市街地のにぎわい創出への思いがある。にぎわい創出には人が集まることが重要ではあるが、そこに集まる人に活気を与え、生活を豊かにしていくことが必要であろう。今後これらの連携により、市民により気楽に文化に触れてもらう機会を提供し、興味がある人だけをターゲットにしていた時代から、公共施設として広く市民へ生活の質を向上させる良質な文化を提供していかなければならない。そのために異分野間での連携は多様な市民へのアプローチ手段として有効であると考えられる。

連携して事業を実施するということは、他の事業展開に比べ手間もかかり、テーマ設定の難しさなどある。しかしこれは、私たちのような指定管理者にとっては人材を有効に活用し、実際に単館で企画しているときには思いつかないようなアイデアを生み出してくれる。

今回は内部組織での連携であるが、身内だからこそ、問題点を言い合い、我慢をしたところもさらけだし実施できたと思う。まだ他地域の先進事例には及ばないが、ここで培ったノウハウを、他団体との連携でも共有し、異分野間相互が気持ちよく連携できる体制づくりを今後も検討していきたい。これらの取り組みは市民に還元されるとともに、指定管理者である私たちの今後の存続意義にもかかる問題ととらえている。